



ANGELICA



奈良県がすすめる「漢方のメッカ推進プロジェクト」の主役は、『大和当帰』である。夏に白い五弁の花を付ける、この可憐な草花は、学名もアンジェリカ・アクティローバ (ANGELICA ACUTILOBA) と、実に愛らしい。最近では艶のある濃い緑の葉っぱも料理に使われるが、本来の薬用部分は「根っ子」である。これにもアンジェリカ・ラディクス (ANGELICAE RADIX) とさう、ラテン名が「あたかもそれ自体、別の生き物のように」と与えられしる。

アンジェリカは、霜が降り始める初冬に掘り起こされ、稲架はざで数ヶ月過ごした後、熱めの湯で丁寧に洗われる。これが「湯揉み」と呼ばれる日本独自のプロセスで、手作業に頼る面倒な工程のだが「実のところ」その必要性はよく分かっている。味や香り付け・防虫・有害成分の除去・有効成分の促進とされるものの、数値的に実証されているわけではない。「方法」の伝統的継承それ自体に「信」が置かれているのである。

日本薬局方が生薬とする「トウキ」は二種類、われらが大和 (奈良) のアンジェリカの他に「ホッカイトウキ」がある。奈良の本地から分かれて新十津川村が開かれた時、移住する人と共に北海道に移ったとも聞く。北の大地に根付いて亜種となり、やがて日本の「トウキ」の大半を占めるようになった。さらに韓国からは奈良の種子から栽培された「甜当帰」、大和当帰に類する技術で調製された中国の「日式当帰」が続々と輸入されている。この内憂外患にあつて、それでも奈良特産の「大和当帰」は命脈を保っている。「身土不二ですから」と植山さん (奈良県薬事研究センター所長) は言う。我々の身体には我々とともにある「大地の恵み」が必要だ、だからどれだけでも育成に手数料がかかろうとも奈良の人は「大和当帰」を諦めない、と。

そうだとすれば、韓半島の人には「甜当帰」、中国の人には「唐当帰」が、日本の「大和当帰」よりも有効なのだろう。生薬は効き目を争う、グローバルな競争にはなじまない。「トウキ」一つとっても多様なのだ。化学薬品のような効能の「普遍性」を否定したところに、「生薬」の「生」の本領があるのかもしれない。

(編集責任者)

奈良のアンジェリカ

— 「大和当帰」という生薬 —